

虫の話（三話）      = = =      三州横山話より

クサ木の虫

蜂の子はうまいものだと言って喰べましたが、クサ木の虫は子供の薬になると言って喰べました。とりわけ土用の丑の日は薬になると言って、捕らえて喰べる風習がありました。クサ木の虫に限らず、山椒魚、ゴーナイ（寄居）、目高、アンコ（山沢に住むハヤに似た小魚）などを、焼いたり、生のまま呑んだりしました。

一般にクサ木の虫と言いますが、クサ木に限らず、虎杖（いたどり）、楊、サルトリ茨などの虫を捕らえて、串にさして、焼いて喰べました。この虫をとるには、竹筒に塩水を入れて用意し、鉈と、細い竹の針を持って行きます。

最初に虫の喰い入って、糞の出ているところが、虎杖や楊の小枝ならば、その木を伐り取って、虫を捕らえますが、大木に喰い入っているのは、糞を除いて、穴の口から、竹筒で塩水を吹き込んでやるのです。そして穴の口に、竹針をあてて待っていると、虫が塩水のために苦しんで、穴の口へ頭を出しますから、そこを手際よく引き出すのです。

アセボの木とダニ

ダニはアセボという樹の下で湧くなどと言います。ヤマギシヤと言う種類が多くて毒があると言います。

山口豊作という男が、コンニャクというところの山へ行って、草の上に休んでいると、いい心持ちに眠くなって、そこへ眠ってしまっ、暫くしてから眼が覚めると、体中がかゆくて仕方がないので、着物を脱いで調べてみると、小さなダニが、一面に体に止まっていたと言います。

シラミ屋敷

八名郡山吉田村の新戸と言うところの重吉という男は久しい前にシラミに喰い殺されて死んだと言って、この屋敷跡をシラミ屋敷と言ったそうですが、その家にはシラミがたくさんいて、家の人の着物は無論のこと、足袋にまでぞろぞろと匍っていたそうです。その家が没落して、残った家を村の者が集まって壊したところが、床下から白い鳩の卵ほどのものが出て、持って見ると柔らかいものなので、何だろうと思って破いて見ると、中はシラミばかりであったと言います。その屋敷跡へは誰も寄りつくものもなかったそうですが、四〇年ほ

ど前から付近の家で畑にしたと言いました。

この重吉という男が、ある朝江戸へ立とうとして門まででると、何か頸筋に喰い付いたものがあるので、捕らえて見ると一匹の大きなシラミだったそうです。何げなくそのシラミを紙に包んで柱の割れ目に入れて江戸へ出かけたと言います。一年ほどして帰って来て、ふとそのことを思い出して、柱の割れ目から紙に包んだシラミを出して見ると、まだ生きていたので、それを掌に載せて見ていると、そのシラミが掌へ喰いついたのが原因で、病気になって死んだので、それから家が没落したと言うことです。